

日本の写真を変えた、伝説的写真家 約20年ぶりの大回顧展 「中平卓馬 火一氾濫」

2024年2月から東京国立近代美術館で開催

東京国立近代美術館(千代田区北の丸公園)は展覧会「中平卓馬 火一氾濫」(主催:東京国立近代美術館、朝日新聞社)を2024年2月6日(火)ー4月7日(日)に開催します。戦後日本を代表する写真家の一人である中平卓馬(1938ー2015)の没後初めてとなる本格的な回顧展です。

日本の戦後写真における転換期となった1960年代末から70年代半ばにかけて、実作と理論の両面において大きな足跡を記した写真家である中平卓馬。その存在は森山大道や篠山紀信ら同時代の写真家を大いに刺激し、またホンマタカシら後続の世代にも多大な影響を与えてきました。1960年代末『PROVOKE』誌などに発表した「アレ・ブレ・ボケ」の強烈なイメージや、1973年の評論集『なぜ、植物図鑑か』での自己批判と方向転換の宣言、そして1977年の昏倒・記憶喪失とそこからの再起など、中平のキャリアは劇的なエピソードによって彩られています。しかしそれらは中平の存在感を際立たせる一方で、中平像を固定し、その仕事の詳細を見えにくくするものでもありました。本展では、あらためて中平の仕事をていねいにたどり、その展開を再検証するとともに、特に、1975年頃から試みられ、1977年に病で中断を余儀なくされることとなった模索の時期の仕事に焦点を当て、再起後の仕事の位置づけについてもあらためて検討します。

2015年に中平が死去して以降も、その仕事への関心は国内外で高まり続けてきました。本展は、初期から晩年まで約400点の作品・資料から、今日もなお看過できない問いを投げかける、中平の写真をめぐる思考と実践の軌跡をたどる待望の展覧会です。



中平卓馬《無題 #437》2005年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira



中平卓馬《「氾濫」より》1971年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira

本展のみどころ

これまで未公開の作品を多数展示

近年その存在が確認された《街路あるいはテロルの痕跡》の1977年のヴィンテージ・プリントを初展示。昏倒によって中平のキャリアが中断する前の、最後のまとまった作品発表となった雑誌掲載作13点です。2021年に東京国立近代美術館が本作を収蔵して以来、今回が初めての展示となります。また1976年にマルセイユで発表されて以来、展示されることのなかった《デカラージュ》など、未公開の作品を多数展示します。

カラー写真の重要作を一挙に展示

1974年に東京国立近代美術館で開催した「15人の写真家」展の出品作《氾濫》をちょうど半世紀ぶりに同じ会場で再展示します。カラー写真48点組で構成される幅約6メートルの大作で、中平のキャリア転換期における重要作です。

また、中平存命中最後の重要な個展「キリカエ」(2011年)に展示されたカラーの大判プリント64点を展示します。

雑誌から読み解く中平の試み

『アサヒグラフ』や『朝日ジャーナル』など、キャリア前半の1960年代から1970年代前半にかけて発表された作品の掲載誌を多数展示。当時、雑誌は社会にイメージを流通させる手段として重要な役割を担っていました。写真がどのように流通するかについて常に意識的だった中平が、同時代の社会に対して、写真を用いて何を試みようとしていたのか、その実態を紹介します。

報道関連のお問合せ先

「中平卓馬展」広報事務局(ユース・プランニング センター内)

〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町9-8 KN 渋谷3ビル4階

Tel: 03-6826-1245 Fax: 03-6821-8869 E-mail: nakahira2024@ypcpr.com



本展のタイトルから―「火」と「氾濫」

「火」は中平の写真に初期から晩年までくりかえし現れるモチーフであり、著作においても象徴的な語として幾度も使われています。一方、「氾濫」は1974年、東京国立近代美術館で開催された「15人の写真家」展に中平が出品した作品のタイトルであり、中平がたびたびレンズを向けた、水など液状のものが路上に流れ出す光景を連想させる言葉です。また「氾濫」という語は、メディアに溢れるイメージや大量消費といった現代社会のありようそれ自体を示唆する言葉でもあります。

火や水など、不定形なものが目の前の風景を侵食し、攪乱するさまは、つねに時代や社会に批判的に対峙し、ラディカルな挑発の姿勢を貫いた中平の思考と実践のあり方とも通じます。

しかしそれは自らの全き変身によってしか可能ではないのだ。だから今その来るべき変身のために、ぼくは全てをまさしくぼくに敵対する「風景」としてみつづける。そしてぼくは待つ、次は火だ！

中平卓馬「風景1」（『デザイン』1970年2月号）

都市は氾濫する。事物（もの）は氾濫し、叛乱を開始する。大切なことは絶望的にそれを認めることなのだ。それが出発である。

中平卓馬「なぜ、植物図鑑か」（『なぜ、植物図鑑か』1973年）

中平卓馬（なかひら たくま）略年譜

1938年東京生まれ。1963年東京外国語大学スペイン科卒業、月刊誌『現代の眼』編集部勤務。誌面の企画を通じて写真に関心を持ち、1965年に同誌を離れ写真家、批評家として活動を始める。

1966年には森山大道と共同事務所を開設、1968年に多木浩二、高梨豊、岡田隆彦を同人として季刊誌『PROVOKE』を創刊（森山は2号より参加、3号で終刊）。「アレ・ブレ・ボケ」と評された、既成の写真美学を否定する過激な写真表現が注目され、精力的に展開された執筆活動とともに、実作と理論の両面において当時の写真界に特異な存在感を示した。

1973年に上梓した評論集『なぜ、植物図鑑か』では、一転してそれまでの姿勢を自ら批判、「植物図鑑」というキーワードをかかげて、「事物が事物であることを明確化することだけで成立する」方法を目指すことを宣言。翌年、東京国立近代美術館で開催された「15人の写真家」展には48点のカラー写真からなる大作《氾濫》を発表するなど、新たな方向性を模索する。そのさなか、1977年に急性アルコール中毒で倒れ、記憶の一部を失い活動を中断。療養の後、写真家として再起し、『新たなる凝視』（1983）、『Adieu à X』（1989）などの写真集を刊行。2010年代始めまで活動を続けた。2015年逝去。

1973年、自己批判を機に、それまでのプリントやネガの大半を焼却したとされていたが、2000年代初頭、残されていたネガが発見され、それをきっかけとして2003年には横浜美術館で大規模な個展「中平卓馬：原点復帰ー横浜」が開催された。



中平卓馬ポートレート 1968年頃

撮影：森山大道

東京国立近代美術館

©Daido Moriyama Photo Foundation



中平卓馬ポートレート 2003年

撮影：ホンマタカシ ©Takashi Homma

報道関連のお問合せ先

「中平卓馬展」広報事務局（ユース・プランニング センター内）

〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町9-8 KN 渋谷3ビル4階

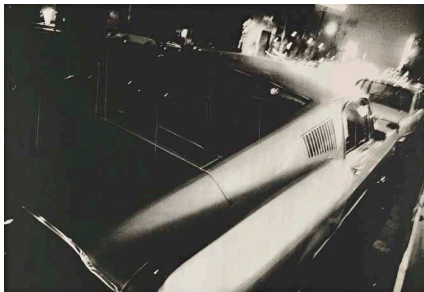
Tel: 03-6826-1245 Fax: 03-6821-8869 E-mail: nakahira2024@ypcpr.com

展覧会構成

本展は初期から晩年にいたる中平卓馬の仕事を、5つの章でたどります。とくに2～4章では、1977年に不慮の昏倒と記憶喪失により中断した中平の仕事が、どこへ向かおうとしていたのか、そこにいたる70年代の展開を詳しくひもときます。

1. 来たるべき言葉のために

雑誌編集者だった中平は、写真家・東松照明との出会いをきっかけに写真に関心を深め、1964年に初めて写真を発表、写真家へと転身するとともに、活発な評論活動を展開するようになります。異議申し立ての気運が高まる時代の中、1968年には「思想のための挑発的資料」という言葉を掲げ季刊同人誌『PROVOKE』を創刊、「アレ・ブレ・ボケ」と称された、既存の写真美学を逸脱した写真が注目され、1970年には初の写真集『来たるべき言葉のために』を刊行します。5年たらずのうち脚光を浴びる存在となった中平の初期の活動を追います。



中平卓馬《夜》1969年頃
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira



中平卓馬《夜》1969年頃
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira

2. 都市・風景・サーキュレーション

1960年代の終わりに生じた「風景論」の論客の一人でもあった中平は、1970年代初頭、「都市」あるいは「風景」という表題の作品を数多く発表しています。そこには都市空間など同時代の社会をとりまく「風景」が、政治や経済の力学に支配され、個人の生を疎外する制度として現れているという問題意識がありました。メディアに流通する写真イメージ自体がその一端を担っていると考えた中平は、1971年「パリ青年ビエンナーレ」で《サーキュレーション—日付、場所、行為》を発表します。その日眼にした現実をおびた数々の写真に移し替え、それをすぐさま展示空間という現実に戻すことで、同時代の「風景」の背後にある制度に抗おうとする革新的な試みでした。



中平卓馬《「サーキュレーション—日付、場所、行為」より》1971年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira



中平卓馬《「サーキュレーション—日付、場所、行為」より》1971年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira



中平卓馬《「サーキュレーション—日付、場所、行為」より》1971年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira

報道関連のお問合せ先

「中平卓馬展」広報事務局（ユース・プランニング センター内）

〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町 9-8 KN 渋谷 3ビル 4階

Tel: 03-6826-1245 Fax: 03-6821-8869 E-mail: nakahira2024@ypcpr.com

3. 植物図鑑・氾濫

1973年に刊行された評論集『なぜ、植物図鑑か』で、中平はそれまでの仕事を自ら批判し、「植物図鑑」という言葉のもとに新たな方向性をめざすことを宣言します。モノクロの「アレ・ブレ・ボケ」写真の中にあったボエジーを捨て去り、世界をありのままに写す「植物図鑑」のような方法への模索は、1974年、東京国立近代美術館における「15人の写真家」展に出品されたカラー写真48点組の大作、『氾濫』へとつながります。これらの展開の萌芽が、すでに1960年代末の仕事に生じていることを明らかにした近年の諸研究の成果も踏まえ、「植物図鑑」と「氾濫」を再考します。

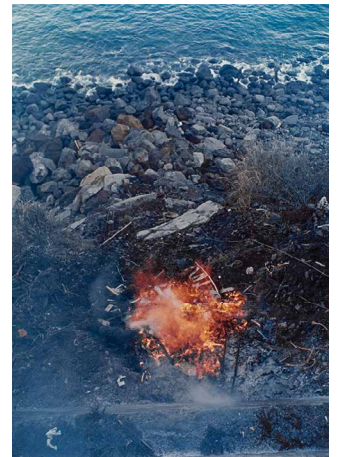
「15人の写真家」展：1974年に東京国立近代美術館で開催された企画展。大きく変貌を続ける映像文化の中で、写真の表現領域が飛躍的に増大している状況を捉え、その新たな課題を探ろうと試みられた。作家と作品の選定は岡田隆彦、桑原甲子雄、多木浩二、渡辺勉の4氏に依頼され、1作家につき8mの壁面を割り当てて構成された。出品作家は荒木経惟、北井一夫、沢渡朔、篠山紀信、高梨豊、田村彰英（シゲル）、内藤正敏、中平卓馬、新倉孝雄、橋本照嵩、深瀬昌久、森山大道、柳沢信、山田脩二、渡辺克己。



中平卓馬『氾濫』1974年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira



中平卓馬『「氾濫」より』1971年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira



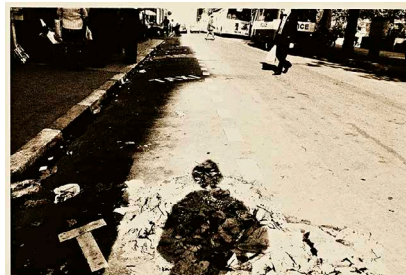
中平卓馬『「氾濫」より』1969年頃
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira

4. 島々・街路

1971年に沖縄で起きた政治的事件をめぐって、翌年初めて同地を訪れた中平は、復帰直後の沖縄をはじめ、1970年代半ばには奄美や吐噶喇列島を撮影するなど、南方の島々への関心を深めていきます。また1976年、篠山紀信とともに『アサヒカメラ』誌上で「決闘写真論」を連載、同年マルセイユのギャラリーではコンセプチュアルな作品『デカラージュ』を発表、さらには雑誌での共作のため中上健次と海外取材を重ねました。それらを通じて「街路」というキーワードも浮上します。しかし、そうした新たな展開のさなか、1977年9月に中平は急性アルコール中毒に倒れ、仕事は中断します。倒れる直前、中平はどこへ向かおうとしていたのか？病により中断された模索の様相を検証します。



中平卓馬『「街路あるいはテロルの痕跡」より
マルセイユ、フランス』1976年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira



中平卓馬『「街路あるいはテロルの痕跡」より
マルセイユ、フランス』1976年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira

報道関連のお問合せ先

「中平卓馬展」広報事務局（ユース・プランニング センター内）

〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町 9-8 KN 渋谷 3ビル 4階

Tel: 03-6826-1245 Fax: 03-6821-8869 E-mail: nakahira2024@ypcpr.com

5. 写真原点

1977年の昏倒は、記憶喪失という事態を中平にもたらします。療養の後、写真家として再起した中平は、以後、晩年に至るまでの約30年間、きわめて勤勉に写真を撮り続けます。日々撮影と暗室作業を重ねて膨大なモノクロプリントを作り続けた時期をへて、次第にその作品は、カラーフィルムを使用し、タテ構図で、世界の断片を切り取るという方法へと収斂しました。かつて宣言された「植物図鑑^{しゅうれん}」というキーワードを想起させる一方で、そうした解釈すら置き去りにする、類例を見ない写真行為として成立しているようなそれらの作品によって、中平は、キャリアの前半とはちがった存在感を獲得していきます。



中平卓馬《無題 #437》2005年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira



中平卓馬《無題 #444》2010年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira



中平卓馬《無題 #445》2010年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira



中平卓馬《無題 #470》2010年
東京国立近代美術館
©Gen Nakahira

展覧会カタログ

本展の開催にあわせて展覧会カタログを刊行します。出品作品のカラー図版、担当研究員による論考や作品解説、作品リスト、作家年譜、文献リストなどを所収。詳細は後日、美術館ウェブサイトにてお知らせします。

報道関連のお問合せ先

「中平卓馬展」広報事務局（ユース・プランニング センター内）

〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町 9-8 KN 渋谷 3ビル 4階

Tel: 03-6826-1245 Fax: 03-6821-8869 E-mail: nakahira2024@ypcpr.com

開催概要

展覧会名	中平卓馬 火—氾濫 ※読み：なかひら たくま ひ はんらん ※「火」と「氾濫」をつなぐ記号は全角ダッシュ（—）。ハイフンやマイナス、音引き（-）を使わないこと。
英題	Nakahira Takuma: Burn—Overflow
会期	2024年2月6日（火）– 4月7日（日）
会場	東京国立近代美術館 1F 企画展ギャラリー
開館時間	10:00–17:00（金・土曜は 20:00 まで）*入館は閉館の 30 分前まで
休館日	月曜日（ただし 2 月 12 日、3 月 25 日は開館）、2 月 13 日（火）
アクセス	東京メトロ東西線「竹橋駅」1b 出口 徒歩 3 分 〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園 3-1
お問い合わせ	050-5541-8600（ハローダイヤル）
美術館ウェブサイト	https://www.momat.go.jp
主催	東京国立近代美術館、朝日新聞社
後援	公益社団法人 日本写真家協会
観覧料	一般 1,500 円 大学生 1,000 円 * いずれも消費税込。 * 高校生以下および 18 歳未満、障害者手帳をお持ちの方とその付添者（1 名）は無料。 * 本展の観覧料で入館当日に限り、同時開催の所蔵作品展「MOMAT コレクション」、コレクションによる小企画「新収蔵&特別公開 ジェルメヌ・リシエ《蟻》」もご覧になれます。

報道関連のお問合せ先

「中平卓馬展」広報事務局（ユース・プランニング センター内）

〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町 9-8 KN 渋谷 3 ビル 4 階

Tel: 03-6826-1245 Fax: 03-6821-8869 E-mail: nakahira2024@ypcpr.com